



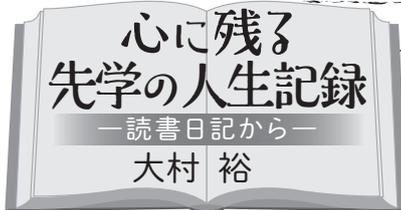
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.181  
2018.10.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第6回

江馬修『<sup>なかし</sup>一作家の歩み』(理論社 1957年)と

あまこ 天児直美『<sup>あまこ</sup>炎の燃えつきる時-江馬修の生涯-』(春秋社 1985年)  
(その3)

この稿の最後に、江馬の考古学に関わる回顧を紹介する。江馬は、若いときから考古学の勉強、特に石器時代の研究に強い関心を持っていて告白している。かねて日本の社会経済史の勉強をしながら、いわゆる有史以前の原始共産社会についてもっと委しく極めたいという願望があったのである。当時のマルクス主義者たちは、「記紀神話」に基づく虚構の古代史叙述を排し、遺跡・遺物に基づく「科学的原始・古代史研究」の構築を目指すものが少なくなかった(渡部義通・赤松啓介・和島誠一・彌津正志など)。江馬もそうした切り口から考古学を学ぼうとしたものであろう。ただし、「現実の理解よりも公式を振り回すことの方に興味が強く働いている」「急進的な歴史家」(引用者註：渡部義通らのことか?)には批判的であった(赤木(江馬)1937「考古学の新動向」『ひだびと』第五年十二号 1937年)。

飛騨には大小遺跡が無数に存在しており、江馬はそれらの遺跡を次々と訪れて、地表に散在する遺物を採集したり、時には発掘調査を実施したりしている。そのため、一時は肝心の文学さえ忘却しかかったということである。この結果、「ノイローゼ気味であった神経が強くなり」、健康の回復にも役立ったという。江馬は、これらの調査に行く先々で農民たちと接触し、種々の有益な話を聞いている。それまでの江馬の交友関係は、「芸術家と知識人が大部分」で、大衆との接点がほとんどなかったため、「こんなまで人民大衆の偉大な歴史的運動をいきいきと描き出すことがどうしてできようか」と悩んでいた。そういう意味で、考古学的調査は農民大衆と接点を持つ上で、極めて有益な手段となったのであった。ちなみに、「山の民」の取材のために農家に上がりこんで話を聞くと、その後からすぐ警察の者がやってきて、江馬とどんな話をしたのか根ほり葉ほり調べられたという。このため農民たちの中には、「警察がこわいで、うちへ寄りかんといてくれ」と言ってくる者もあり、家々を訪ねて農民たちと接点を結ぶことは困難な状況になっていた。その点、たまたま遺跡で出会った見ず知らずの農民たちと立ち話する分には、そのような干渉は少なかったであろう。

考古学研究に熱中したことから、「文学だけでなく赤い思想からも離れた」と判断され、治安当局の監視の目も緩やかなものになったようである。江馬は、「郷土研究、特に石器時代研究への熱中ぶりが、戦時下に生きる私のために一つの有力なカムフラージュの役目をした」と回顧している。ただ、農民大衆を主人公にした壮大な歴史物語を構想する江馬にとって、「人間」を忘却したかのような1930年代後半の日本先史考古学界の動向(編年至上主義)は、物足りないものに映ったであろう。江馬が切実に求めていたのは、「遺物と住居址を通して当時の経済的な社会構成を復元する事」にあったのである。かくて江馬は、「遺物用途問題と編年」(『ひだびと』第五年十一号 1937年)を提起するのである。

この批判の矢は、「編年学派三羽烏」(山内清男・甲野勇・八幡一郎)に向けたものではなく、彼らに追従して無目的に土器編年のみに邁進している研究者たちに向けられたものであったので、甲野・八幡らとの議論は平行線に終わった。なお、押型紋土器を出土した江馬子ひじ山遺跡報告の作成に当たっては、山内清男の懇切な教示があったにも拘わらず、江馬の自叙伝には山内の名が一切出て来ない。当時の著名な碩学や、敗戦直前に、わずか数か月間飛騨高山に滞在していた東京帝国大学人類学教室員の名前は丁寧に記録されているのに不思議なことである。ちなみに、人類学教室の高山疎開決定には、この地に江馬が在住していたことが計算のうちに入っていたらしい。期待に違わず、江馬は高山近傍の村の村長に教室主任の鈴木尚を紹介し、山口小学校の一角を人類学教室に開放してくれるよう話をつけ、教室員や学生の宿舍の割り当ても手配したのであった。教室の疎開が一通り完了すると、江馬は人類学教室の嘱託に任命される。これまでの江馬の労に報い、かつは地元と人類学教室との関係を調整する必要からこうした配慮をしたものらしい。この嘱託の身分は、敗戦濃厚の折柄、再び厳しくなった警察の監視から自分を守る役割を果たすものとして、有効であったという。

当時の人類学教室の実情を知る上で、江馬の自伝は貴重である。人類学教室の主任は鈴木尚であって、長谷部言人は既に停年で退官しているにも拘わらず、依然実権を握っており、鈴木はいちいち彼の専断的な命令に従って動いていたという。学生のための講義はもはや行なわれず、彼らは開墾や野菜づくりに動員され、嘱託たちも食糧調達に奔走していたらしい。戦後進歩的考古学者として名声のあった嘱託の和島誠一が、「同志の筈」江馬と二人きりになっても時局に対する批判めいたことを一切言わなかったという証言は、この時代の重苦しい雰囲気を実感させるエピソードとして興味深い。

敗戦を迎えると、人類学教室は東京に戻ることにになり、鈴木は江馬も東京に来ないかと誘ってくれたが、このまま高山に残ることとし、教室へは辞表を出している。既に1944年5月を以て江馬の郷土研究の拠点であった『ひだびと』は停刊していた。そして人類学教室との縁が切れた段階で江馬の考古学研究者としての側面は完全に消滅したのであった。江馬は約10年の間に一回の欠号もなく全112冊の『ひだびと』を発刊、中央・地方の有名・無名の投稿者の原稿を載せ、世間や学界の注目を集めた。中央の学界にも臆せず自らの所見を述べて反省を迫った。一人の研究者が一生かけても実現できない仕事を短期間のうちに見事にこなし、赤木清(江馬修)は、彗星のような光芒を放ちつつ静かに学界から消えていったのであった。なお、江馬の発掘関連資料は「登録文化財」となり、高山市風土記の丘学習センターに保管されているという(建石徹氏ご教示)。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第6回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第174回) 松下 修 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえます (第3回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「文化遺産の社会学」 新田宏子 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえます (第3回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 3. 芹沢長介氏との遠距離共同作業のことなど

1957年の初秋、西海岸に面したワシントン州のプリースト・ラピッズ遺跡での発掘を終え、再び大陸を横断してボストン近郊のハーヴァードに戻り、院生生活の三年目をむかえた。当年度の課題は人類学科の大学院課程を修了するための口頭試問をめざして勉強すること。ハーヴァードの制度では修士論文はないが、博士課程に進むにはジェネラル・イグザミネーションとスペシャル・イグザミネーションの二段階の口頭試問を通過しなければならない。当時のハーヴァードの人類学科は徹底的な総合人類学だったから、ジェネラル・イグザミネーションでは、専門分野にかかわらず、民族学、社会人類学、考古学、から形質人類学、言語人類学に関する知識も試される。これを通過すると、スペシャルでは専攻分野、専攻地域について専門の先生方が諮問される。これらのイグザミネーションのために配布された参考文献のリストは1センチくらいの厚さだったと思う。

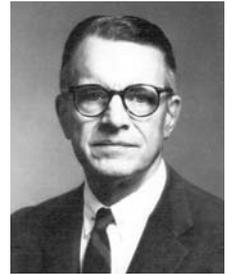
その勉強の一方、前年度からの懸案はモヴィウス先生に提出した日本の旧石器に関するレポートを公表できるような形にすることだった。岩宿発掘から10年もたっていなかったが、すでに北海道から九州にいたる各地で100ヶ所近い遺跡が確認されており、これらについての概観や展望も出版されていた。杉原壮介の「日本における石器文化の階梯について」(『考古学雑誌』1953)、「縄文文化以前の石器文化」(『日本考古学講座』1956)や芹沢長介の「関東及び中部地方における無土器文化の週末と縄文文化の発生に関する予察」(『駿台史学』1954)、「日本における無土器文化」(『人類学雑誌』1956)などである。ところが、日本語以外の文献としてはマーリンガーが権現山I、II、IIIの石器群と岩宿のIとIIについてドイツ語と英語で紹介した論文が3点づつあるのみで、各地から出土している多様な石器群の全貌についてのまとまった記述は皆無だった。私がモヴィウス先生に提出したささやかなレポートはホットニュースだからどこかに公表すべきだと周囲から勧められて、その年の12月にシカゴで開催されたアメリカ人類学会の年次大会で発表することにした。

アメリカ人類学会(American Anthropological Association)は総合人類学の全分野を網羅する学会で現在の会員数は10,000名以上、年次大会には5,000名以上があつまる。60年前のシカゴ大会がどのくらいの規模だったのか記憶もないし、記録もみつからないが、エライ先生方が大勢来ていられたのは確か。その前で「日本の先縄文文化」と題する発表をさせていただいた。アメリカに来て2年半足らずの院生だったのだから、おそらくたどたどしい発表だったろうと思う。いずれにしても15分の時間制限があるから、詳しいことはいえないが、プリースト・ラピッズ発掘で知り合ったワシントン大学人類学科の人たちが、この舌足らずの文章をほとんどそのままの形で同学科が出しているデイヴィッドソン・ジャーナル・オブ・アンソロポロジー(Davidson Journal of Anthropology)という刊行物の第3巻2号に巻頭論文として印刷して下さった。ただしタイトルは「日本の無土器時文化」(Non-Ceramic Culture in Japan)と置きかえて

いる。当時、縄文以前の石器群の呼称として、「先縄文式文化」、「先縄文文化」、「無土器文化」、「先土器時代の文化」、または単に「石器文化」などの用語が使われていた。「旧石器」と言い切った人はまだなかったようだ。杉原氏はそのころは「縄文文化以前の石器文化」という言い方をしていたが、1960年代から「先土器時代」に落ち着いたようだ。芹沢氏は「無土器」を使っていたから、私はその影響でタイトルを変えたのだろう。

私の小文は日の目を見たが、この時点で本当に必要だったのは、日本の旧石器文化の遺物群を詳しく記述し、その相互関係や周辺文化との比較をした論考だった。丁度このころ、極東先史学会(Far-Eastern Prehistory Association)の機関誌としてアジア・パースペクティブ誌(Asian Perspective)が発足し、1958年発行予定の第2巻第2号は、モヴィウス先生をゲスト編者として旧石器特集号とする計画があった。私もこれに参加することになり、例のレポートを更新・拡張するについて、その際お世話になった芹沢長介氏に正式に共著者になっていただくことにし、芹沢氏との遠距離共同作業がはじまった。Eメールもファックスもない時代だから、やり取りに随分時間がかかる。しかも、この1958年の春から夏にかけて、芹沢氏は、荒屋、白滝、タチカルシュナイ、神山など次から次へと発掘調査に出ていられるので、連絡が途絶えることがしばしばあった。その一方、これらの遺跡で得られた情報を書き込むことが出来たので、最新情報を網羅した論文になった。「日本最古の考古学的資料」(The Oldest Archeological Materials from Japan)という表題は少し大袈裟だが、これはモヴィウス先生の示唆によったものだ。私共の原稿を受け取られたとき、編者のモヴィウス先生は大変満足され、私宛の書簡で、日本の最古の考古資料をこれほど包括的に扱ったものは今まで何語でもなかったと言ってくれているが、それと同様のことを、編者の緒言でもくりかえされている。

モヴィウス先生のご指示で日本旧石器文化研究の原動地であった明治大学考古学研究室の考古学者とお知り合いとなり、日本旧石器に関する英文の文献の最初期にかかわらせていただいた。杉原壮介先生に直接お目にかかったのはこれより2年先の1960年、芹沢長介先生とはさらに3年後の1963年だった。それらの事情については次回でふれさせていただくことにする。



▲Hallam L. Movius 博士  
(1907-1987)  
[Harvard News Office 所蔵]

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都市大学【現:首都大学東京】社会学研究助手補
1954-55年	東京都市大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部)【現在ハーヴァード大学に合流】修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-79年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員、2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## Uレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 174

## 国指定史跡 大谷・定古墳群 ～岡山県真庭市上中津井～ 松下 修

私が本稿でご紹介するのは、岡山県真庭市にある「大谷・定古墳群」です。

平成20年3月に国指定史跡となっていますが、恥ずかしながら、指定を受けていることをつい最近まで私は知りませんでした。本稿執筆のお話を頂く直前に恩師と会う機会があり、その際に国の史跡になっていることをはじめとお聞きしました。

そのことが頭にあったことも多分にあるのですが、それだけでなくこの大谷・定古墳群は、私にとってたいへん思い出深い古墳群です。大谷・定古墳群は6基の方墳で構成されていますが、私はそのうちの定東塚・西塚古墳、定北古墳の調査に参加しました。学生時代、私がはじめて参加した古墳の発掘調査が定北古墳であり、この調査が私を古墳研究の道を歩ませるきっかけとなったことを考えると、感慨深いものがあります。今回、本稿の執筆依頼があったときに、真っ先に頭に浮かんだのがこの大谷・定古墳群であったのは当然かもしれません。

それでは、この大谷・定古墳群のどのあたりが私にとって魅力あふれるものであったのか、ご紹介したいと思います。

大谷・定古墳群は、岡山県北部の吉備高原に囲まれた盆地内を流れる中津井川流域に、7世紀から8世紀にかけて築造された6基の方墳で構成される古墳群です。すべて外護列石を伴う段築の方墳で、それぞれ大谷1号墳、定東塚・西塚古墳、定北古墳、定4号・5号墳と呼称されています。

古墳時代後期以降の首長墓が一地域でこれほど継続して造営されることは、それだけでもたいへん珍しいと思いますが、吉備の中心である南部平野ではなく、北部地方の小地域で連続して築造される大型の首長墓の系譜を追うことが可能であることは、稀有な事例であろうかと思えます。また、大谷1号、定東塚・西塚、定北では遺存状態が良好で、出土遺物も多く、その点でもたいへん貴重な古墳群となっています。すべて内部主体は横穴式石室であり、古墳時代後期から、いわゆる「終末期」の古墳にかけての石室の変化を観察することができます。

出土遺物や墳丘・列石の構造の比較から、定東塚、定西塚、定北、大谷1号、定5号、定4号の順で築造されたことがわかっています。

定東塚古墳は石室全長が11.6m、礫岩の割石を石室石材として利用した片袖式の横穴式石室を内部主体としています。墳丘規模については、定西塚と接続して築造されているためはっきりとしない部分がありますが、列石の状況から約20～25mの3段築成と考えられています。石室からは、4基の陶棺が見つかり、武器・馬具等数多くの遺物が出土しています。また、全国的にもたいへん貴重な例となった金糸が出土しており、被葬者の身分の高さが窺えます。

定西塚古墳は、前述したとおり定東塚と接続してつくられており、石室全長が10.7m、定東塚と同様、礫岩の割石を石室石材とする片袖式横穴式石室を内部主体としていますが、定東塚にやや遅れて築造されたことがわかっています。2段築成の方墳で、15m前後の規模であったと考えられています。5基の陶棺が確認され、武器・武具等に伴い人骨も見つかっています。

定北古墳は、定東塚・西塚のある場所から尾根沿いにやや登った山の中腹にあり、石室全長10.0mの両袖式の横穴式石室を内部主体としています。石室石材として主に礫岩が使用されていますが、先行する定東塚・西塚とは異なり、切石となっています。3段築成の方墳で、東西21.0m、南北25.3mと大谷・定古墳群で最大の規模を誇ります。石室からは、4基の陶棺とともに武器や銅椀が出土しています。蔵骨器が追葬されているのも特徴的です。

大谷1号墳は石室全長6.0m、切石の石材を用いてつくられた両袖式の横穴式石室を内部主体としています。基壇を含む5段築成の方墳で、東西は22.7m、南北は16.2mです。石室からはやはり陶棺が見つっていますが、大谷・定古墳群で唯一、須恵質のものとなっています。また、金銅装環頭大刀と金銅製品が見つかっており、現在は岡山県指定重要文化財となっています。

定5号墳、定4号墳は小形墳で、外護列石を伴う方墳であることがわかっています。

それぞれの古墳についてきちんと説明すると紙面が足りないのかかなり端折っていますが、それぞれの古墳の遺存状態も良く、出土遺物の多様さとボリュームについては群を抜いています。その分、調査・研究の材料としては事欠くことがない、興味深い古墳群ではないかと思えます。

私自身は、定北古墳第3次調査を皮切りに、定東塚・西塚古墳の第1次調査から第3次調査にかけて、学生時代の4年間にわたり参加しました。すべての調査で横穴式石室の調査に関わり、とくに定東塚・西塚古墳の調査では想定外の遺物量であった上に、金糸の出土という衝撃的な事件に遭遇することになったことは忘れることができません。同じ場所で調査をしていた後輩が、薄暗くて手元の確認しづらい環境の中、太さが1mm以下で長さが1～2cmの木のヒゲ根にしか見えない金糸を見落とさなかったのは、驚きでした。

また、遺物量もさることながら、終末期古墳特有の外護列石を伴う方墳という外観は、古墳のイメージをぼんやりとしか抱いていなかった私にとっては、自らのもつ古墳像を覆すものでもありました。古墳と言えば巨大な前方後円墳を想像される方も多いと思いますが、前方後円墳が体现している古墳時代のイデオロギーと言いますか、古墳を通じて表現されている“意思”とは異なるルールで作られている終末期古墳は、古墳とはなにか、を遡って考えるのに適した題材だと思えます。

これらの成果は学生の手によって報告書にまとめられています。いままでも古墳に興味のなかった方にも手に取っていただき、ぜひ一度ご覧いただくと幸いです。

## 参考文献：

近藤義郎・河本清編1998『大谷一号墳』北房町埋蔵文化財発掘調査報告7 北房町教育委員会

新納泉・尾上元規編1995『定北古墳』岡山大学考古学研究室

新納泉・光本順編2001『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室 北房町教育委員会

真庭市教育委員会編2008『史跡 大谷・定古墳群』

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは岡本 洋さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「文化遺産の社会学」

荻野昌弘編／新曜社(2002)

新田 宏子

文化財、世界遺産、日本遺産、土木遺産、近代化産業遺産、ジオパーク…未来に遺すモノや場所は、私たちの周りで無限に増え続けている。何を捨てて何をとおけばいいのかわ、私のような文化財保護業界のはしっこにいるものは、何をすればいいのかわ。そもそも、なぜ文化遺産を護る必要があるのかわ。そんな疑問を改めて考えさせてくれたのが、この本だった。

考古学しか勉強してこなかった私にとって、稀代の社会学者達を書いた本書はとても難解で、ウンウンうなりながら読んだ。よって全てを理解できているとは思えないが、この本の概要と、印象に残った論説を紹介したい。

本書の構成は、次のようになっている。

第1章 文化遺産への社会的アプローチ…荻野 昌弘

第2章 モノと記憶の保存…小川川 伸彦

第3章 戦争と死者の記憶

(1) カタストロフィの記憶…アンリ・ピエール・ジュディ

(2) 記憶の政治…脇田 健一

第4章 真正か複製か

(1) 流布・保存・パロディー複製美術館試論…小川川 伸彦

(2) 文化遺産と観光…アンリ・ピエール・ジュディ

第5章 地域の集会的記憶—フランス

…荻野 昌弘／アンリ・ピエール・ジュディ

(1) フランスのエコミュージアム

(2) 過疎地域の文化遺産—オートマルヌ県の運命

第6章 地域の集会的記憶—日本…脇田 健一

第7章 かたちのないものの遺産化

(1) 無形と有形…荻野 昌弘

(2) 祭る文化…アンリ・ピエール・ジュディ

(3) 古墳と陵墓…山 泰幸

終章 保存する時代の未来…荻野 昌弘

編者の荻野氏は、この本の特色は「文化遺産とは何か」「保存の意味」「博物館の社会的位置」等といった人文・社会科学的な問いに初めて正面から取り組んだ社会学書であることと言う。

第1章で荻野氏は、他者の生産物を所有したいという欲望を〈博物館学的欲望〉と名付けた。博物館学的欲望の特徴は①一度手に入れたモノを手放すことを拒否して、それを永久保存しようとする②「本物」を探し求める、の2点であるという。

また、博物館学的欲望を抱く者は、一方的に自らの判断基準に基づいて、何が文化遺産で何がそうでないかを決定していく。そして自らの日常生活に加えて異文化に関心を示し、「世界の二重化」を体験するという。国家は、しばしば博物館学的欲望を実現するための推進者となる。このような現象が起こると、いたるところに「遺産」としての価値が見出され、遺産化現象は加速すると述べる。さらに、日本における文化遺産化は、モノではなく「物語」や各種の技能を蘇生させることをめざすという特徴があるという。

荻野氏の言葉に触れ、私は現在の日本で遺産化の流れが止まらないのも、このような欲望が根本にあるのだろうかと感じた。また、最近流行りの「日本遺産」が、「我が国の文化・伝統を語るストーリー」を看板に掲げているのも、日本の文化遺産に対する姿勢を反映しているかのようだ。いずれにしてもこの論説は、私た

ち「保存しようとする者」の欲望、エゴを炙り出すものだったと思った。

第2章で小川氏は、「保存」のあり方にこそ文化遺産化現象を考えるヒントがあるとする。保存されるのは、単なる物物だけではなく、保存の営みがなされた当該社会の価値観や欲望がそこに保存されると見る。

さらに、博物館に展示されているモノは全て、それらが本来依存していた個々の文脈から引き離され、博物館の中で再文脈化されるという。例として仏像をあげ、博物館で異種のものが文化遺産として等しく並び合う空間の種の居心地の悪さや、寺院の仏像に対して「国宝」と「宗教的価値」が混淆していく現象を説明する。

この論証を読み、いたく納得した。博物館に置いてある仏像を見た時、私はなんとも言えない「居心地の悪さ」を覚えることが多い。職場の博物館に置いてある出土人骨を見ても同じように感じることもある。本来それがあべき場所から切り離され、博物館に鎮座している事態の気まずさの原因を、小川氏は上手く説明している。さらに小川氏は、保存世界に参入し文化遺産となる時に、モノたちはその存在の意味を置きなおされ、様態はそれ以上変更が許されず、凍結されることになるという。

第7章の山氏は、古墳を考古学者とは別の角度で眺めている。信仰の場としての古墳の側面に注目し、古墳の文化遺産化はそれが放つ「死臭」を払拭し、「消毒」してしまうという。山氏は田中琢氏の「かつての機能を喪失し、生命を失ったかみえる遺跡も、地域社会の人々の生活のなかでは、新しい別の機能が付与されており、歴史的環境の大きな構成要素となっている」という言葉を紹介し、陵墓が文化遺産となった場合の一つのあり方であると述べる。

終章で荻野氏は、資本主義的の欲望と博物館学的欲望の質は、極めて似通っていると述べる。伝統的建造物群保存地区指定で迷惑を被った住民の声を紹介し、文化遺産化はゲッター化を招くこともあると言う。最後に、文化遺産保存の未来は、偶然のなかの必然、不自由のなかの自由、あるいは運命と幸福に結ばれることのなかにあるような気がする。と結ぶ。

以上、難解な部分も多いが、この本を読んで思うのは、文化遺産の保護=善という考えの危うさである。本書の全体を貫く社会学者たちの思想は、我々学芸員にとってはとても辛口で耳が痛い。博物館の中にいると幻想を抱きがちだが、世の中の全ての人が歴史に興味があるわけではないし、無関心も含め、文化遺産への思いは人それぞれである。また、本書が書かれたのは15年以上も前であるが、筆者らが指摘する文化遺産化の流れは、まるで彼らが予言したかのように今現在急速に進行している。

この本には、博物館という文化遺産を愛する人が集う「温室」にいる私にとって、「目からウロコ」なことが沢山書いてあった。自分の中の「欲望」を認めて、驕らず謙虚に、住民のために文化遺産をどう扱ってあげばいいのかわ、これからも考え続けていきたいと感じた。

## アルカ通信 No.181

発行日 2018年10月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp